令和４年度　大田区立嶺町小学校　自己評価　報告書

令和5年2月27日

○　自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標		成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄 評価	人数	コメント
プラン１　未来社会を創造的に生きる子供の育成	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これからの社会の変化にしなやかに対応する子どもの力と自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外国の方々とのコミュニケーション能力の育成等を図っている。	４：「おおむねできた」と全教員が回答した。 ３：８０%以上が回答した。 ２：６０%以上が回答した。 １：６０%未満であった。	4	６年生校内アンケート「コンピュータやインターネットなどを活用して、情報を収集して自分の考えをまとめたり、発表したりすることができる」と答えた児童の割合 区の目標値 ５０％	４：50%以上 ３：50%未満 ２：45%未満 １：40%未満	4	○6年児童回答数　131名 ９月の区アンケート調査 できる　42．5% まあまあできる　49．1% あまりできない　8．5% できない　0% １月の校内アンケート調査 できる　50．5% まあまあできる　45．2% あまりできない　4．3% できない　0% 教員向けのICT研修を月１回行い、授業におけるタブレット活用を推進してきた。また、児童のキーボード入力向上に向け、重点月間を設定し、2年生以上に目標をもたせて取り組んだ。次年度も学年毎に学期毎の課題を設定し、計画的に活用能力の向上を図っていく。	A B C D	8 1	・職員の方々の努力が見られる。 ・コロナ禍で子供たちはタブレット端末を使い、学校との連携等、スムーズに使えていると思う。情報収集能力が活用できていると思う。 ・児童のアンケート調査の「できる」割合が増加しており、良い。タブレット端末を活用した発表等は、中学・高校でも多くの行っており、今後も必要なスキルになるので、更なる向上を目指してほしい。 ・成果指標を超えており、よい。これからは、災害にしても、健康にしても、もちろん学習においても、PC等の活用の時代になる。アクティブラーニングも浸透してきた今、家庭学習の重要性も出てくる。まずは、興味をもって自主学習からスタートし、学校でさらに学び身に付けさせたい。子供たちのPDCAを充実させたい。 ・子供が嶺町小に通っていた昨年度までも嶺町小のICT教育は、進んでいると感じていた。その後の取組について、直接感じる機会はなかったが、「嶺町日記」を頻繁に見させていただいている中で、日々の教育の中に自然とICTが活用されていると感じた。先生方の中でも、ICT分野の得意不得意がある中で、研修を継続しているのはすばらしいと思う。子供たちのキーボード入力向上も、単純に可視化できる技術として、子供のやる気につながるのではないかと思う。 ・子供よりも教える立場の先生方のスキルアップや考え方の変革が必要な取り組みだと察する。我が子を見ていても、タブレット端末を使いこなす力はどんどん身に付いているのを感じる。 ・児童の情報活用能力は大きく向上していると思いますが、目標にある「コミュニケーション能力」「ともに生きる力」なども含めた、多面的な成果始業が設定されることを期待する。
		論理的、科学的な思考力の育成を目指し、「おおたのものづくり」を生かした体験活動や理数授業等を実施する。	４：全教員が行った。 ３：８０%以上の教員が行った。 ２：６０%以上の教員が行った。 １：６０%未満であった。	4							
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ＩＣＴ機器を活用した授業を実施する。	４：設置教室を使用する全正規教員が週１回以上活用した。 ３：８０%以上の正規教員が週１回以上活用した。 ２：６０%以上の正規教員が週１回以上活用した。 １：６０%未満であった。	4							
		他者の人権を尊重する人権教育の推進を目指し、人権教育資料等を活用した授業を実施する。	４：対象となる全学級（全教員）で行った。 ３：８０%以上で行った。 ２：６０%以上で行った。 １：６０%未満であった。	4							
		体力テストの結果を踏まえ体力向上全体計画を作成し、計画に基づいた体育指導や「一校一取組」運動や「一学級一実践」運動を実践する。	４：全教員で行った。 ３：８０%以上の教員で行った。 ２：６０%以上の教員で行った。 １：６０%未満であった。	4							
プラン２　学力の向上	児童・生徒一人ひとりの学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習カルテを基に児童・生徒と面談し、一人ひとりの学習のつまずきや学習方法について、指導する。	４：対象となる全学級（全教員）で行った。 ３：８０%以上で行った。 ２：６０%以上で行った。 １：６０%未満であった。	4	６年生算数の学習効果測定期待正答率を越えた児童の割合 区の目標値 ７０％	４：70%以上 ３：70%未満 ２：65%未満 １：60%未満	4	学習効果測定期待正答率 ７３．４％（昨年度７２．０％） 区の目標値を上回った。 今年度、学年に応じた基礎的な計算力を確かめる校内検定を３学年で実施し、計算力の定着を図った。次年度は「数と計算」を重点課題とし、全学年で校内検定を行い、計算力の定着を図り、算数全般の学力向上に取り組んでいく。	A B C D	9	・孫たちから学校で算数のテストを受けてきたと報告をもらい、学校の取り組みの状況が手に取るようにわかる。 ・校内検定を行うことにより、子供たちの目標ができ、成果につながっていると思う。今後も実施してほしい。 ・区の目標を上回り、よかった。校内検定の実施が良い意味での競争心となり、個人がクラスへとつながり一丸となれ、計算力の定着につながったと思う。この成果が次年度への重点課題となり更なるブラッシュアップとなればよい。校内検定が学習過程で進歩につながったといえる。 ・学習に対する意欲は、学校生活だけで身に付くものではなく、家庭での親子の会話や日々の生活からも、興味関心が生まれ学びにつながると思う。学校と家庭が同じ方向を向き、子供の学習に対する意欲を向上させる努力を日頃から行うことが大切だと考える。そうしたことができている結果だと思う。 ・校長室での検定に、子供が一生懸命取り組んでいた。子供をそういう気持ちにさせていただけるのは、保護者としてもうれしいことである。 ・今年度は算数を成果指標に設定されているが、今後も国語力も含めて、基礎的な学力向上に期待している。
		算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:学期に２～３回知らせた。 ３：学期毎に知らせた。 ２：年度間に１回は知らせた。 １：お知らせできなかった。	3							
		学習補助員等による算数・数学・英語の補習を実施する。	４：対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 ３：８０%以上の教員が働きかけた。 ２：６０%以上の教員が働きかけた。 １：６０%以下の教員が働きかけた。	4							
		授業改善推進プランを、授業に生かす。	４：「おおむねできた」と全教員が回答した。 ３：８０%以上が回答した。 ２：６０%以上が回答した。 １：６０%未満であった。	4							
プラン３　豊かな心の育成	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、未来への希望に満ちた豊かな心をはぐくみます。	小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	４：全教員が行った。 ３：８０%以上の教員が行った。 ２：６０%以上の教員が行った。 １：６０%未満であった。	4	６年生校内アンケート「自分にはよいところがある」と答えた児童の割合 区の目標値 ８４％	４：84%以上 ３：84%未満 ２：80%未満 １：75%未満	1	○6年児童回答数　131名 校内児童アンケート　12月調査 6年生「自分にはよいところがある」と答えた児童の割合 72．0% （全国学力調査での同質問「自分にはよいところがある」と答えた児童の割合　89．3%） 全国学力調査時の数値と異なり、区の目標値を大きく下回った。 全学年の平均も74．6%という結果であった。（1年生65%、2年生65%、3年生59%、4年生75%、5年生79%）特に、下学年の低さが顕著である。 改めて、「一人一人のよさ」「その子のよさ」に目を向け、積極的に評価することを心掛けていく。	A B C D	2 7	・目標値が高すぎるのではないかと思われる。 ・教職員の方々の努力が見られる。 ・「自分にはよいところがある」とは、なかなか答えづらいところがある。一人一人の個性を伸ばすことはよいことである。 ・外部から見ても、児童一人一人にはよいところがあると思う。自分たちのよいところに気付いていないだけかもしれないし、他人と比べてしまい、このような結果になったのかもしれない。ぜひ、子供たちのいいところを学校・家庭・地域で気付かせていきたい。 ・自分の良い点・悪い点は大人でも意識していないと分かりづらい。自己有用感はチームの一人でいること。常に参加していないと良いところかどうか分からなくなることもある。ほめてもらうことで、だんだんと分かってくると思う。記載のとおり、「一人一人のよさ」「その子のよさ」に目を向け、積極的に評価することを心掛けていくことを、引き続きお願いしたい。 ・直接、嶺町小の子供たちと接しているわけではないが、日々通学路や公園、また友人のお子さんを見る中で、そんなに低い評価なのかと疑問に思った。「自分にはよいところがある」という抽象的な聞き方でなく、いくつか例を出してあげる（「毎朝、大きな声で挨拶ができる」「友達にやさしくできる」など）と、「よいところ」の範囲が広がるのではないかと思う。 ・PTOとして何かできることがないか考えさせられる。 ・国際的に比較しても、日本の子供たちは自己肯定感が低いことが指摘されている。児童の自己肯定感の向上に向けて、施策を検討・実施していただきたい。
		道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	４：学期に２～３回（年間６回）以上行った。 ３：学期に１回（年間３回）以上行った。 ２：年度間に1回以上行った。 １：実施しなかった。	4							
		学校生活調査（メンタルヘルスチェック）の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	４：「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 ３：８０%以上の教員が回答した。 ２：６０%以上の教員が回答した。 １：６０%未満であった。	4							
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	４：「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 ３：８０%以上の教員が回答した。 ２：６０%以上の教員が回答した。 １：６０%未満であった。	4							
		問題行動・不登校問題等にかかわる児童・生徒に関するケース会議等を実施する。	４：必要な事案に対して必ず会議を実施し、組織的に対応した。 ３：必要な事案に対しておおかた会議を実施した。 ２：必要な事案に対してあまり会議を実施しなかった。 １：必要な事案に対してほとんど会議を実施せず、組織的な対応をしなかった。	4							
		日常的に、児童のよいことを見付けてほめる指導を心掛けている。	４：全教員で行った。 ３：８０%以上の教員で行った。 ２：６０%以上の教員で行った。 １：６０%未満であった。	4							
プラン４　体力の向上と健康の増進	スポーツに親しむ心の育成や、運動習慣の定着による体力の向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	４：全教員で行った。 ３：８０%以上の教員で行った。 ２：６０%以上の教員で行った。 １：６０%未満であった。	4	６年生体力合計点 区の目標値 男子６０．６２ 女子６１．６８	４：目標値以上 ３：目標値未満 ２：90%未満 １：85%未満	3	6年生の体力合計点 男子　60．5（昨年度　60．1） 女子　62．9（　〃　59．8） 男子、女子とも昨年度を大きく上回った。また、全学年男女とも、昨年度の記録を上回った。 体力テストに向けては、教員向け研修会を行い、各学年の目標値を設定し、上回った児童には表彰することを事前に予告して取り組ませた。目標を明確にしたことで、意欲的に取り組む児童が多く見られ記録の向上につながった。次年度に向け、休み時間の外遊びを確保するとともに、授業・体育的活動も見直し、年間を通した体力向上策を定着させていく。	A B C D	6 3	・コロナ禍で制限のある中において、外遊び等に配慮をして児童に接していることは評価している。 ・下校後、外に出る機会がない子供が増えているように感じるので、学校の取り組みに感謝している。 ・コロナ禍の約３年間で、子供たちの体力の個人差が大きく開いているように思う。そんな中、駅伝大会の結果や取り組みのすばらしいと思うし、朝と昼のマラソンタイムの取り組みもすばらしいと思った。校庭の広さは十分ではないと思うが、多摩川土手という恵まれた環境の中で、子供らしくたくさん体を動かし、日々の遊びの中で体力向上を目指してもらえたらいいと思う。 ・研修会をもち、評価の目を育てること、よいところの見方を学べるとよい。評価基準をどこに置くかによって設定によって見方も変わる。 ・来年度は、外遊び（土手）ができるようPTO・地域で協力していきたい。 ・コロナ禍でなかなか集団で運動することができなかったことを考えると仕方がないと思う。今後、外での運動を取り入れていけばよい。 ・今年度、子供たちの体力向上のために、様々な施策に取り組まれてきたと伺っている。今後も、子供たちの健康増進のための取り組みを進めることを期待している。
		給食指導及び教科等における指導を通して、食生活の充実・改善をねらいとした「食育」を推進する。	４：全教員で行った。 ３：８０%以上の教員で行った。 ２：６０%以上の教員で行った。 １：６０%未満であった。	4							
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	４：全教員で行った。 ３：８０%以上の教員で行った。 ２：６０%以上の教員で行った。 １：６０%未満であった。	4							
プラン５　魅力ある教育環境づくり	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良質な教育環境をつくります。	授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	４：「おおむねできた」と全教員が回答した。 ３：８０%以上の教員が回答した。 ２：６０%以上の教員が回答した。 １：６０%未満であった。	4	学校公開保護者アンケートの肯定的な回答（AB評価）の割合	４：90%以上 ３：90%未満 ２：85%未満 １：80%未満	4	○保護者回答数　６６２名 学校公開保護者アンケートの肯定的な回答 ９６．８% （昨年度９６．２%） 年間を通し、各学級３分割の分散方式で学校公開を行った。参観者も多かったが、肯定的な回答が圧倒できであった。この結果に甘んじることなく、今後も、保護者が安心して任せることのできる学級づくり・授業づくりに取り組んでいく。	A B C D	8 1	・アンケートの回答者も多かったのに加え、肯定的な回答が圧倒的である。どのような回答が多かったか、個人の考えが分かるとよい。 ・今後も学校開放等含め、保護者に安心して任せることができる学校であるようお願いしたい。 ・マスク・手洗い・黙食等、児童を取り巻く環境は大変である。学校公開・授業参観等での先生方の努力に感謝している。 ・学校と保護者の信頼関係は、児童の良好な教育環境の基盤になる。今後も必要に応じて、家庭との緊密な連携・情報交換を行い、子供たちの成長を支えていきたい。 ・保護者の肯定的な意見が多いことが何よりの結果だと思う。 ・学校公開等を分散で行っている故の横のつながりの低下はあると思う。
		授業改善セミナー等の研修成果を生かし、主任教諭が助言・支援を行う校内研修等を実施しOJTを充実させる。	４：学期に２～３回（年間６回）以上行った。 ３：学期に１回（年間３回）以上行った。 ２：年度間に1回以上行った。 １：実施しなかった。	4							
		各種研究発表会等の研究・研修の成果を、自身の授業改善に生かす。	４：「おおむねできた」と全教員が回答した。 ３：８０%以上の教員が回答した。 ２：６０%以上の教員が回答した。 １：６０%未満であった。	4							
		校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。	４：月1回以上行った。 ３：学期に2～3回行った。 ２：学期1回以上行った。 １：実施しなかった。	4							
プラン６　学校・家庭・地域が一体となってともに進める教育	学校・家庭・地域が担う役割などを明確にし、地域に開かれた教育の実現を目指します。また、相互の連携を深め、子どもを育てる仕組みを作ります。	教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	４：月1回以上更新した。 ３：学期に2～3回更新した。 ２：学期1回以上更新した。 １：更新しなかった。	4	保護者アンケート「学校は、地域やＰＴＯと連携して子供を育てている。」のA評価の割合	４：65%以上 ３：65%未満 ２：60%未満 １：55%未満	3	○保護者回答数　６６２名 保護者アンケート「学校は、地域やＰＴＯと連携して子供を育てている。」 A評価　６４．８% （昨年度　６３．５%） AB評価　９８．８% （昨年度　９５．９３%） AB評価は非常に高かったのだが、目標としていたA評価の６５%には惜しくも届かなかった。AでなくBであった理由を探るのは難しい問題ではあるが、今後も保護者の意見に耳を傾け、PTOや地域と連携した教育活動の改善を図っていく。	A B C D	6 3	・学校での学びや習得したことが、実践の場として日常生活に活用できるように地域でも見守りたい。 ・来年度、PTOと地域で何ができるかを考えるよい機会としたい。 ・学校と家庭の連携がうまくいくように、地域として様々な行事を計画してコミュニケーションがとれるように努力していきたいと思う。 ・PTO活動もスタートして10年経つ中で、このスタイルが定着してほしいが、その反面無関心な保護者も増えている。今後はコミュニティースクールがスタートすることもあり、「嶺町日記」で様々なゲストティーチャーをお呼びしている様子も見ているので、保護者（PTO）だけでなく、より地域の力を取り入れた活動を活発化させる取り組みが必要だと考える。 ・PTOや地域の活動に先生方の参加が減っていることが原因ではないか。PTOボランティアセンターとのつながりは作ってくださっているが、一般保護者からは見えない部分になっているので、PTOとしてもやれることを考えてみる。 ・保護者の中には、学校が地域やPTOとの間でどのような連携・活動を行っているかを十分に認識できない方もいるのではないか。取り組みを保護者に周知するための広報やお知らせを工夫することで、保護者アンケートの結果の改善につながるのではないか。
		地域教育連絡協議会において、児童・生徒の変容等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。	４：毎回情報を提供した。 ３：おおむね情報を提供した。 ２：あまり情報を提供しなかった。 １：情報を提供しなかった。	4							
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実践する。	４：学期に2～3回行った。 3:学期１回以上行った ２：年１回以上行った。 １：実施しなかった。	4							

○「成果評価」は、各校が４段階で定めた成果指標によって行う。
○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。
○学校関係者評価の「評価」は、Ａ：自己評価は適切である　Ｂ：自己評価はおおむね適切である　Ｃ：自己評価は適切ではない　Ｄ：評価は不可能である　の４点について、 評価した人数を記載